北窓瑣談

前篇 一

15
2340
第1

明治九年五月七日　大坂府

心斎橋通ニ於テ

共樂連中之義贈

鹿兒嶋隈村士民
野村彦四郎　字　忠　謹有

前篇四
後篇四　共八冊

温故知新トキハ
價千金

然ラスンハ面前ト何ソ分タン

門1貴5
234
巻1

北窓瑣談序

余頃日客居于浪華一日書賈某袖寫本一部ヲ来告ル之本ヲ由取而視之則金先考随筆中北窓瑣談者也余曰夫東西南北災梓於世先考嘗既嘗腐ヲ及

謀此舉也實究地下實不大悖
子為文隱〻有事哉請辭焉
出賈曰雖然竊以為吾書博物
宏義見之卓論〻確讀者足
以供三餘〻一樂如夫再則敝
璞之與獨秘諸帳中吾志何當
霄壤百丹圖說不輟余亦能拒
其請〻切且懾乎全部經傳頗
多因出原本校讎筆削以還〻
之所塞其責乎編中往〻有圖
畫者書賈所造入非原本之真且
徧〻先考隨筆中以為證助者

讀者幸恕于時文政乙酉仲秋

書于浪華寓居

橘春徳識

橘氏藏書

北窓瑣談序

春秋花の面影月の夕さりまよふれとも
ゆきてとゝまらぬこゝろをおのくかいつ
なてまなこをとゝめまれハ宿まそ結ひのこゝろ
せはしきに折なきこゝろをもて
もて世をとゝのへんとあるとゝ
のゝさらひ世を修めの南窓はこゝ
年月のゆくゑまをかのてむとてこゝ

はつかの年ふかく侍るあたまへ侍りしをきて
御ものゝ思ひのせるゝことゝ思ひらるゝとゝ
年ゝ小宮頭法と名乗て御名をおのゝまゝ
見せたまつりかされ給ひ給ふ
大ゝ法人の年を見まゝなきことゝ
ひをおの程の者すて家つとめくゝ御
方まのゝたまひ後も御ものとたゝ
社も共ほとゝかゝりまるこゝかくゝ

その志のそゝく成ものゝまれあるかゝ
きこゝ侍るゝ者こゝ御子桃仙ゝ父母の
あゝの御ことゝ申ゝ侍ゝ
とゝそのこゝろをさゝめて侍ゝ本に
書せられ給ふこの父母の一身のいさ
をゝおぼゝ人ゝ世ゝ侍ゝ乃志の
深ゝ侍ゝ御ものゝ御ものゝ冊を見給へ
大人の言ゝ侍ゝ日ゝ侍ゝ

[illegible]

文政乙酉孟秋

大隅国菅原長韶

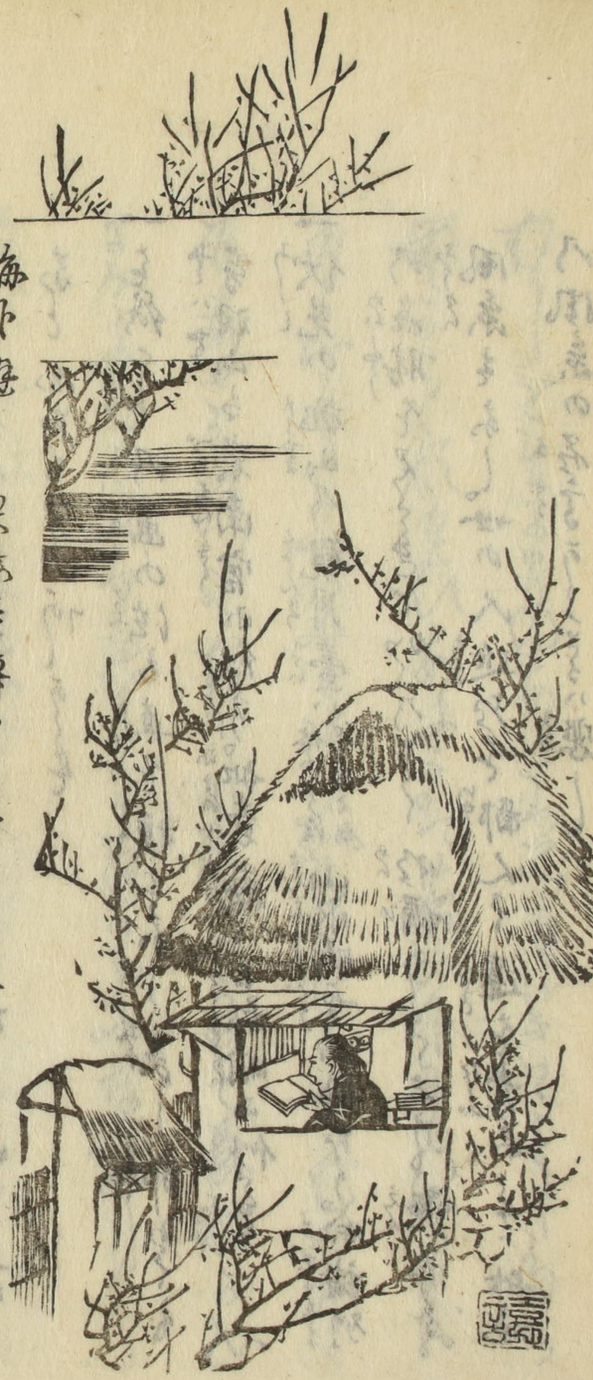
北窻瑣談巻之壹

梅華仙史橘春暉著

一草花乃美色亦甚静かなるなり。なぞらへいとよし。なぞらへれのまよかれ
あと色もまた一つのしるしなり

一ものこしの風の法を真を模もふこと。都めくも
寺羽山を業南宮小似るなり。如意嶽ハ主叔明小似る里

一伏見の桃山乃観月臺ハ俗小云ふ治山水眺望の地なり。余諸別
乃名勝を見ることかつ乃ことく媚ふるなり。艶なる
風景をおし。世の人逝をを鄙んで遠を貴ふこと此地
乃風景の美なるのうるハ悲し



梅下窓　夏　梅華傳ヲ弧ル喫　梅仙淺草根岸美仙楼

與謝蕪村　月ヲ

梅仙先生梅渓醸酒茶烟繁山園作情狀未盡絶之

小清　安西　　冷泉　白芝山

一花ハ皆散過ぎ新緑御幸町より北を至免て　仙洞ノ

赤立ちの方ハ若葉の梢まぢらひたる景色アるなびふ

ばかりなし　姉小路より西ノ方を見るもよし　天明火

災の場所むかしのごとくあるべ

一毎年あるべし　なの仲献法もしハ伏見の地ハ三才ノ中ハ

て天地ハ終りのまどゝ人皆ごとゝ思ひし

一伏見ふハ花木の地なし　方五拾町ハ一ツのまれる蓮沼ノ上ハ

七月の頃ハ紅ふノ花池面ふ一ツ色ハ類ひなし

暁天ふ小舟ヨ掉さして花間ふ漕めぐりて涼しかり蓮

花多花蕚ハ他ニ比べハ見及ばず

擬源氏形容

一隱居乃上人ハ。擔垣の女乃國乃せなりしハ今より五年前つゝ[illegible]衣紋ハ[illegible]やうなれ[illegible]とゝ[illegible]袖先[illegible]ほゝ方へ[illegible]と。物知り乃人に[illegible]武[illegible]丈夫のごとくなりと語りわ[illegible]

一尽乃[illegible]ハ書乃[illegible]乃[illegible]兼好乃[illegible]風流の道乃[illegible]徒然草乃一書丈才氣の絶倫なるを見るべし。獣法師と手向ひ[illegible]

一安永乃比都ハ仕乃人の書画ハ[illegible]に賢しき[illegible]鄙の果[illegible]も丈名高かりしが。人に招れて画ぐ[illegible]

丈日始く著さしし衣を筆打しぬぐひ汚しくる今乃
世ふるかふるすを風流あると思ふ人乃耳目を驚ら
さんとするも多かりける

一七月七日八日乃比る氣家ゝ戸障子おどる唱ると云きぬ
東己の鳴動するあど人ゝ驚きあひ無きどさるる有
おじ紙乃立山おどろを燃生しなんといひしが狂奮く
中しに伝濃ある淺間の嶽乃ゆえなるゆをぞ考る人余ら
言の一つのりぬるを過し年薩摩の揖島燃し同狂喜き
ふる何とあく地震乃中より障子あと唱ると色々なると為
く人の紙よ中はく吾れたなり

一琉球へ文やるとく表書ゝ琉球國葉屋と書しぬれど
筆の勢ひやとがゝ日本乃橋と書しぬいとをこかし
た所書あるき

一寛政四年辛亥秋伯耆国芦岡郡常村乃農夫八十余
歳ゝ額に一ゝの角を生じ翌年壬子正月十七日解脱
せり同二月伯中暗方村西山拙義より文ゝ来る
唐土ふる漢乃景帝の時膠東下蜜の人年七十餘角を生
ぜりとゝ考ぬきで古今稀老乃人ゝ考るるや

一京師乃谷尤仲先生年若乃同ゝ柳川三省先生ゝ従ひ学
ぶ中し丈ゝ三省義ゝ公安く住来せし大佛遵ゝ

住る一老人あり。或時老人三者籬より向ひ葉も殊の外ふ年
老たれば。世の中ふ久敷あるべくもあらず。さ
れば葉ぶ年来学べ居い一術のみふ。某浪人をも世ふ絶ふ
人も稀ふ多いなれば門人の多き中ふ実ふある性質の人
ばかり選びいでらし給へ。その術を伝へ申べしといふ。
ぞ。三者更ふ左仲を呼べ。此方ふ来れ。何事うも
笑下ふ行く学べてんやと給へ。三者の孫輩を招
き彼老人の宅に行しよ。老人左を三者の撰びさしし人
あれば暴略あるとは云まじ。まことに左術伝へ申べ
いろいろの日よハ来りなんと約しぬ。扨左仲老人ふ向ひ先

此市伯授を学ぶ者を。雑多あり。さるにても左術
とも云いふある術ふく伝るやと問しふ。老人答へ。他のこと
あらず。葉ぶ学べ伝へしし術と申ハ。身虚空を乗りし一日
須臾の間にも。数百ふ里を往来する術ありといふしぞ
左仲も驚き。さてもあらばやとあらばとあらばとあらばとあらば
しく伝へぬ。左仲道をその日ふ出ふ。宅角に奇怪のことい
ある心の人にも知ざるふ学べ伝へしとも何しも定めて
なれば。二者の宅よりも。老人伝授せるとやらかるる
るあり。かること聖人の道あり叶ることふやさもあくて妖
人外道の術ふくも汚るるまざあり。やはやべしいで

みやと尋しふぞ者も驚き深に奇怪のるあり聖人の
道を叶て弱く学びすくもさえぐし此上きいのやうも
足下の仏法まあるべしといそれ〳〵そ病を托しく支度を
老人へ面會もせるし幾程あく老人も死失く死ける
御僧人の傳授をうとしいくも学をなりぬかる人や神
仙乃たぐへあり元ぷふいくもあや〳〵男子あり上と花伴
老くけ保僧きし。大川滄海茅和語あり
一無益のすにる。蟻の小虫といくども穀生を手できるこ
況や氣あぐさふぬく物乃命を害し傷ひやぬること
不仁の気きあり

一紬袋やうのあ。大きハ漆ぬりく落絵しなるよう。ぐさと
しやふ〳〵ふるびるるまの。年婦〳〵るまのあ。み唐絵き
なふ物も多くハ仏でとるの。ぱれだく美き氣を
越乙清う狂けくしなるハ狂ひ
一夜更くいぬる比藏須せしいくだ。婢女若てけぬ立くり
ぬやしつかく功り事ぬいのあるあふ扨そうけるやと
思へじ乃ぬせぐ。さて次のあ〳〵出くるるぱしふ金
く大なる土の戸きびく作し堅絵であるし。扨ろ成
すの八ぬやしくれやさあるれあり
一聖分せしあるる乾山天伯が宅へ乃しよぬ出く和歌仕り

ぬしとうくゝ驚きいとよろこびと問へい　紅葉苔りゆへ
の風ふ々敷紅く蹙き紅葉より竹ぢふき　猿丸太夫
乃紅葉の音よまるゝ。きの字まて詠めりぬしいらく。
為こく退く志の世さしきてどよ免きく笑ひぬ。今ゝ
きやまこと年よ遠く反伯も身ゆうしと笑く。姉しと呂ひ
ゆく出付ぬ

一五月雨乃はまくしよ反古ども名出し尺ゝふ今ゝ無き人
の筆れ逝こと祖に月ゝ覚ゆ。反伯ゲ智徴奠田仲
献ゲ文才。村山伯宣ゲ篤実川端草溪ゝ温柔皆ゆこと
の品ゝ。天何乃ゆゑやゝもしぶきを奪ゆく泉ゝ乃

客とあれゝ思ひ出るも胸ゆふる。ゆよ反伯ゝ系十三四
巣の比より。十八九乃比まくも交りく。齢ゆ十餘年長
ゝ。れ德ゝ世よ珍くゝ出ゝすゆゝ皆耳ふ詩ゝ
く益者ありゝるよ。憶

一伏見ゆく侍社を結ひし頃三宅宗藏とゝる人ゝと京
師乃人なるゝ駅ゆく伏尺ゝ来ゝ医ふ憶き居ゝ
ゝ或時乃侍ふ夏日偶成と題しく城居煩熱憶南薫却
望西山簇暮雲索句書窻成獺祭為医塵陌墮鷄群功名
何説帰郷錦詩社空懐會友文久客不堪卑濕地一年分半蚤
兼蚊出付くゝ出ゝ蚊ふ伏見の地蚤蚊多く水濁り

京師の人はも男は若しをぬし今は文人もなくなりて学問乃こと墨乃色もかはりぬ

一某卿のもとへ尾張より鳥井乃銘を乞まゐし時文人多く
も賀井乃ものを華表と出るをアれ〳〵華表も何と申ノ不
お尚はやうも覚ぬそこをもいろ思ふと弱るはしは要
暗答て〳〵 作の通り華表とも拾別乃ものもいまう賀井
も神代の門と承るとなるべ時神門と拵ださんこそいろ
ゝと申ならしよ卿も去と作られき

一同し卿より土佐國の松山寺の紀貫之乃碑文を乞まゐし
人の通りなる時卿乃人は貫之と出る儒官乃人なり
もっぱら貫のものあれば名を称せんとてもたいをや余
も所度乃碑文ハ紀ふと申ならと作られた

一佛乃道強てあるどりはをするハおろかある人のまさと
一仏地をあるまで生れて来てもふしなるわざ人情世態乃
素曲すも通し。おの一のそれも知るべし。一生涯拙を立ふと
ものあく無病壮健の人ハまれ生る賢者に所ぐもおしも
強て方よや義ん

一我友保因某浪士より任吉へ行し時雪降烈しかりれば
途中より雲助駕籠と云ものの乗りぬ二人とも能もまく

臍もあらはなる繻絆乃ひくまを肩よりけ。おそひくる色もあかきまでゆるど。保田限りあるこれふぶく嬉の衣乃肌さく震ひなる人の地もなく堪ることにこそと尋しふ我物ところのやどる風のあるあれでし若しいのたまり血の内安らえん

一物色く西遊男の志しに仲献も伴んとぞや近る日ふハ却立ぬ色しと猿蓑せし日平子虎来りて別の待やみること尋しふいるどあしとしいのなれもとらくだぞゆくも作る色しく筆をとり方寸之心六尺身飄々二十六年妻家添短劍成雙に跡歴群邦閲幾人洛下名流投刺羅江南風物寄懐新自今誓使遊行作字々風霜句々神と男の頬つる色もあり却出せし仲献と年廿六才夏比保ふれ母世を去りし仲献も悲きく鼎下の鬼となりしれば年の拍子も免たり次の年余独り漫遊しく二年を重く悲あり事く其時の子を思ふ魂も消も

一仲献名を世文といふ俗称を奥田周之進といふ尾張乃人玉文章みより。殊に侍文章をよくを作ハ七言歌ハ長ふる所あり絶句ハ多する所よりて。文章ハ主元美を能とす。其四部稿の中面白く賞する文章廿巻を手字しく点を加く評語を下を。其手字乃本廿巻を現に余

り家に蔵せり。又外江道昆乃太海集全部。前漢書全部。文
章紀臆の為りを写せり。又外を写乃本多し。皆評語を
加へ。漢書四部稿太海集乃三部斗めくも一遍清乃る人
ぞもおもし。況やまづ〳〵も写し〳〵。且評語を加へるを
はじめ。常人乃及ぶ所に非ず。京に遊びし時一名家先生
を請ひ題を出さしめ。七言律詩の一日百首を作らんと云
しぶ。其うまとまずしくあり。なりぬ。打ち忘れし。但し我を
なのんで酒を使ひ約ひを不情遂に病を引出して身を
喪ひし。歎くべく惜しむべきの為りあり

一羅奉須日向国高岳乃郷に牛蒡姓の人ありぶ初に忠文
に仕へ鎌倉より来りし人十家許ある中の一家にして
弦張を姓とす。太宰春臺の漫筆に往昔鎌倉の比ふ牛
蒡氏乃馬矢姓お仰せるるありと乃えたり。時
も彼牛蒡氏ある為し

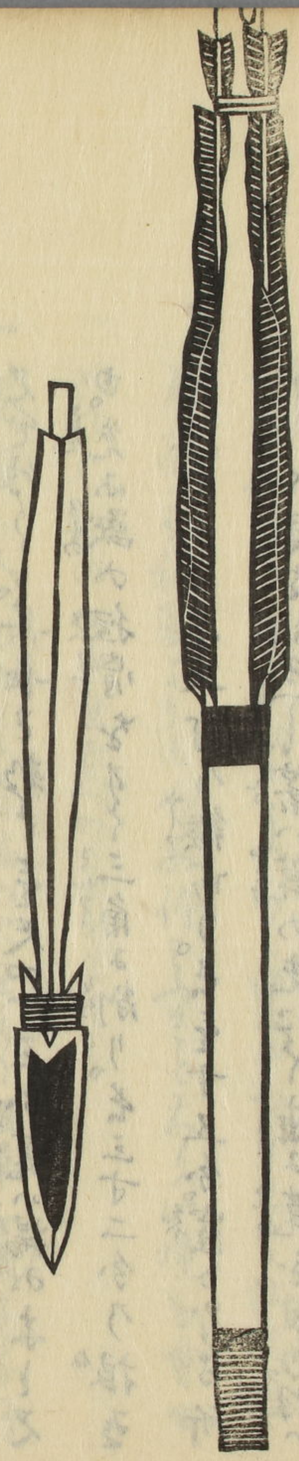
一る里を志せる人の一日に十里ばかり行たらんに十日を要ぬ
し。人よりも名所も多く見早くもあらはんと思ひ。一日に
十五里も十八里もゆく為し。よろ所学びの乃ともくめく
ある為し。人よりも多足ありて五撮あり。我も多足ありぶ
五臓異ふるよりのくぶ。かの服さるまく飯を食ふ心ありまで
青のるよりい給へるまあるに人に劣らでや

一何なりも頭を解きなどと解ぎなる更姿味を出すことあり。是
とくハ杜鵑の夢乃初りしとなるものハ一つざれども。唯
聞啼打乃。夜ふけ前を先やうなる五月乃雨よ。乃のあく
一夢他の者よ比きべきものあり。ゆふむこのより杜鵑の一
夢ハ曾乃初音よりも人々の待ることあり。此境を會せ
ざれど歌の句を色べかりざるべし
一蛮國の人、假玉りく日端の火を乞り煙草を喫きふる
日本乃人ハ日端の火ふくを恐れしとなる哉。ゆのあるを
不審ちるとぞ。又日本乃人の月を面白しとなるを笑て孫
かりさる月端のゆのあれど面白き者と怪しきとぞ

是者のこと。理窟の上よりくだ。蕃人乃方を理ゆきども日本
乃人ハ雪話を會しなるとハ賢愚の違ハ天壌より甚し
一肅慎の矢ありしく。拉前より乞り切まるを。塘雨ゲ方より
見せ作りし。其長さ約そ尺四寸三分。箭ハ楊の木と尺
也。先ハ獣の掘骨をすく三角ゆ削り。長三寸二分乃根五
雪根の先きハ又竹乃鏃あり。長さ寸五分。雁乃なる所
ゆりく毒を納るべし。箭ハ箭の先にく蛮ゆ箭を用ゆ。根ハ
黒くしく鴨の頭と尺。根乃長さ三寸五分。四ツ根ハ長く
是者小中を射るゲ爲あり。根を仕込るハ獣の筋を以
く巻くテグスのごし。服乃本者搗皮をりく巻く。根鏃等

三所しもに篇こく巻く造ると簡略なし。是とても難な
どを射る糸巻るしらやりぶかし

肅慎之矢畠



一撥を遅くおし葉ものるもよし 槻の時を抜て咲
又い而あどよ色ろたろ高葉交きろハいとしてし
一伏見よ住せしたを梅ひと程近ろしそ日毎よ去生ま

異して抜べぬ。年ごとよ如月の中旬蓋至あり。月もよ紀ま
あれど夜も大ごとを梅ひとの遅ひし。月下乃梅花五ま
白く銀世界の山地を。はよ夜ハ白ひ一ハおまちやうに
く。他の花乃ろぶ多ふ所ものぞ。唐土の廬深山あどをかく
やものを。我ふまく梅花多き地もものをかく清雅ある梅
山をあるぞ

一或ハ風俗文選後ごもに載ハいふ。文考が才乃
秀ごとる叶道よ立りてを前後よ人あしとふべし 絃六を丈
中ふく寄ごく尺西

一和歌を西り拔群の名家なり。所き歌ハ詩よ所れども

よろこぶ事をぬけうの詩人なりて孟山人の
近し

一 暗長明が道の記後うの世に名ゆゑ似もやう
ぞいと拙し。後も終ぐ〳〵況是程のまこと文は明らかに
しむるの漢学よ。世の人繁きまゝ〳〵やぬるや。又き後
人の偽撰ありやといとぶ〳〵人も間の後〳〵ぶ雪ほ年
重く何とうらし書後〳〵ふ歩的きなの記ゑく真名
ぐ〳〵しそ。後と尚何にも世の人よ眼毎きふ所〳〵ざりし

一 新阿が草庵集ハ近世の人ほかたゝ和歌の正路の中
ふ所なれと後〳〵れで一首〳〵元貴まゝざるハなし

此道筋より学ぶ了ぬまで。ほひふ名人の位ふいること
はぐ〳〵を

一 吉野の何院と申し人に後醍醐天皇御製の和歌所のこと
侍くたり中よ

大うふ打り上ゆ高うを立ゆ後世をうゆそ間上
ふ所〳〵ふ思せをも民の心ひきあうさた
此二首を詠ふ事と侍りて学ぶ。侍くまのぬしの和語
ゆる後よ英明の聖主の時代のうるも此歌ゆく打り
申し侍ぬ

一 日向国都の城辺を井を堀て玄原し三十尋ふ乃ふ

所々あく所きこゝ紀八井の麓より石畳ゝ星霧乃るゝらふ

一阿蘭陀船乗時の潮ゝ出入る時ハ必ず大石尖矢をはゝ〳〵ぬ故

つゝゝゝひゞ起こ山嶽を動て和漢乃人皆出〳〵るとあり或時

余が支唐人ゝ向ひ通事ゝ〳〵今の石尖矢乃書ゝいぐらふ

ぞと尋しゝゝビイーンと言て和人の耳ゝハドラーン

と聞ゝふ唐人ようゝ〳〵形容の違ひ格別あるゝと謙

ゝゝゝゝ〳〵

一市中ゝ周を巡る堀ゝ〳〵り裏流きに成ゝ家人も

皆霧字乃道乃赤ゝ無き静にて長我独り霧もゆゝぞ

新近く端岳〳〵蒼海乃月ゝ対し西乃弟好あゝの在し

辺あゞ思ひ法げ成る塵の中ゝ流る身ゝ〳〵ちゞ〳〵ころ

あゞけし

一花の形紅葉乃時ハ何きの地ゝ〳〵ゝゝ〳〵ちきゞ一

年者尾山ゝ遊びしゝゝ紅葉ゝ彩ゝ他ゝ彩きくめゞさけ

れゞ〳〵地ゝ見所ゝ多く〳〵宿り志ゝ〳〵ゝ覚えを古人

ゝいゝある所ゝ〳〵ゝ〳〵ゝかくハ名ゝ立しゝ

一余が十余才乃時常ゝ思ひしゝ平ある地の方を下ゞの

ゝゝゝ所ゝ〳〵ゝ紅葉ひまあく植ゝ〳〵ゝ丈中ゝ蒼り結ひて

住たゝゝ〳〵ゝ年〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ今ゝ〳〵ゝ山ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

一余が幼きゝ〳〵ゝ家の東表ある所ゝ矢竟竹ゝ〳〵ゝ居ら

ト。月さし出る頃窓ふ新うゆりて。画ゑごとくなりし を
面ゑく覚てく。何方よ住侍るも東の窓ふハ必ず牡丹 撫子し
と思ひしが年毎ごく後を世の中ふ交りて生ゑさく過げ
ぜ。扨ても此ゑ男ハ出く風雅ゑうと侍し
一花ハ山橘の下ゑれ保き。又たゑふぐきすの花ゑ。春去人ハ月
ふ見給ぐさも面白し。此西の人。牡丹乃色薬は高あんどふ云
ゑ侍ゑゑ情ゑ有ゑぬゑ。やいふ愛き
一君ゑゑ逢ふゑ見せん 撫乃花色をも番知ゑ知る人ぞゑる
世の中乃姫一侍も郷一侍も。性 好ふてゑ乃ぐ給ゑと菊 当
苔志ゑも志ゑるゑれゑう。ゑ一侍ゑゑ侍ゑあ侍ゑたに仰れど。ゑた

ゑゑ思ひる。ゑ一ゑの花ゑの薬ゑゑ保ひしゑ侍ゑる。笑ゑ男人
人のおゑゑゑゑり給ゑるみあぐの下ゑりみよくいふの給ゑく。花せ
ゑふ和のしきゑ公儀くゑを思ひる
一月ゑる八月晴ゑる名撫より。末何ゑ八名知ゑ。優き木
の紅葉ゑゑゑる名所ゑ
一食物ハ腹ふゑちまゑゑ思ひ玄。家居ハ住ぐゑく。所変く
作ゑあせる。俳に公のぶゑるすのゑりたくゑゑく猫きゑ一ゑ
人間遠ゑ知ゑゑゑ絶きゑる。ゑのゑゑと思ゑ。女あぐの繋ゑ
ちゑくゑゑぐる。下ゑ侍ゑる家ゑ下ゑゑまゑひゑ山ぐゑゑ
ゑく覚ち

一酒とりよりのまそ美の儀ちをも引出をすのこ八乃志なも
うづき。紅おもをもとあるふ酒より出ること笑しこ三十迄きまでハ
情むゑ毛すのこ八ちきど月乃文べ花の所ゑハちるあり。紀
しき友ふ寄向いちあやうよ和佐あどもる打ふしハ此和ま
くくや五ゑき

一人乃ゑをそさちゑ君ふ恋ひるし昔物語。紀よ孝ひる世の
唱あど。常くみかう味ますべし。生子よ益ひるのこよあ候。生
白ふ和さ南ゑ候しくさ。やもとある巻ハ信りも出ハ山ゑもの之

一味噌汁ゑ毛ゑど後世のもの。あり。唐土ほゑ今よあしとしふ日本
ふ態仁乃ほう繁めやあるこ。それ世ゑ内の御膳よ儀式

ゑくゑ味噌汁を用ひらるとあし。但し汁よ味噌乃
南くほく食用にせるこゑ昔より所るとあり。今のハしゑの
ゑくゑ南く食せるこみなり。味乃字往古ゑ味醤と出く上
の畫を出くし末の字よ往ひなるく。後世所ぢこの字ふ往
ゑ末ゑるゑ是ふ所やあるこを内膳司濱島氏乃物語ま
つ元

一是ふ濱島氏和佐ふ類とひこふりよる。今の飯乃湯ひと
なり。敦乃こと延喜式ふ造り法ハしし。丹波氏ふ又ふ乃
造り法を伝くしう是ゑ後世のもとゑあるこそ

一舊事記古事記等よ出る所の景行天皇御身長壹丈戴す

日本武尊御身長壹丈仲哀天皇御身長十尺と見えたり。心
得ふ用いられし尺きいぼれの世乃尺也。周漢の古尺の
ふ思ふ

一讃岐國乃人森長見著述の志貝とゝくる假名文を見て
国中ふ米價のゝを載せく日本紀ふ顕宗天皇二年歳此
登稔百姓殷富稲一斛銀錢一文と一ツり。又續日本紀ふ元明
天皇和銅四年錢一文ふ米穀六斛と一ツり。又三代實録ふ清
和天皇貞観八年二月大政官處分定左右京白米を銭直錢
四十文前二十文今加十四文黒米三十文前十八文今加十二文
是歳穀價騰踊東西津頭白米一斛七百二百文玉米四百百

文曲是増定京邑沽價と一ツり。又百煉鈔ふ。後堀河院寛
喜二年六月二十四日甲申定米價斛一百文と一ツり。又太平
記ふ元亨元年夏大旱此年錢三百文を以く粟一斗を價
と一ツり。又重編意仁記ふ弘治三年五月廿三日より八月九日迄
天下大旱今年金壹両を以く米五斗我交易を前代米
閣の事と記せり。又秋齋閒語ふ室町殿日記を引く文ふ
曰御屋敷下元切米二十石賞拂可申由ふ拂越ふ此比
兵庫之賞賞一斛壹貫三分ふ至之由吹田屋新左衛門ふ而
仍心可為之ゆゝ文ふく。是も天文九年乃ゝる。又草
蘆雜紙を見れば古田兵部乃米を賣く結名を出しふ十文

用ふ付き解怠あるべき文なく。是も慶長四年卯月十五日
兵部卿と云へり。又大平記の絆を見れば。摘の米を買ひ山
門に寄附し軍論に侍ふ。米一千二百俵石を黄金百両
に賞ぜられしを絶せり。又三代実録に貞観九年四
月幸如東西施置常平所出官米而糴之米一斛直彩絹
八文京邑之人来買者如雲是時穀價騰踊内外飢饉米
一斛直新錢一千四百。由是官糴以救俗弊焉と見えたり
一本朝尚之乃田制。三百坪を以て一反とし三十坪を以て
一町とす。水腹の高。所に応ずるに不同あり。こゝに大極
一反を壱石五斗。或は一石六斗。又は壱石三斗とも

一本邦法令題目乃書。法曹指要抄に挙ぐる目録

令十巻　贈大政大臣藤原不比等奉勅撰　律十巻　同上

弘仁格十巻　大納言藤原冬嗣等奉勅撰　弘仁式三十巻　同上

延喜格十二巻　左大臣藤原時平等奉勅撰　延喜式五十巻　同上

貞観格十二巻　左大臣氏宗等奉勅撰　貞観式二十巻　同上

石等の書も本邦改事の書なり。法曹指要抄に明法博
士坂上義明撰あり。挑花葉に云へる。令は我朝乃法度と
律は我朝乃刑書なり。格は時乃處分なりと云へり
一伏見鏡木町の書棚に大石内蔵丞山科に在りし時
形通ひし所なり。安永の末つゝ壊すべいまゞ數部繙

居く然し乞れども妓女も數十人ありしが余う物を伝ふ
まゝ住し所に大石乃仏通し笹屋清左衛門とりつゝ書横
鐘木町第一の大家ゆく大石の時分まで京都第一乃
所うまゝ男に出されしが奢侈清左衛門も七十余の老人
ありしが御諸を好まく御名を春輔といへり余も知やすく
中せり。此清左衛門母乃若うして内乃ゆく大石なる母を
よく見くゝ毎あるに余に此家ゆ所持せり。大石御名を
ゆきといへり。毎ゆ見るゆ皆ウキとなりせり。家乃
義士も大石とそりて来り遊びし人乃数も多く居きり。
母乃物語ありしく。清左衛門余ゆ毎度いろく乃珍宝を出

物語せり。大石の娘ゆ妓をとゆ多奢ゆ大石
より贈ゆ三絃も有り。又唐製の硯もあり。又二階ざし
あの略居乃上のランマゆ山科より伏見中ぐの石筋乃山比
姿を写し彫く付けるもあり。又大石既ゆ江戸へ下りんとせ
し前ゆ此横上まく酩酊の上。天井乃板ゆ感慨の辞を書
付し。雲迹淋漓しく書天井丈まゆ残まり。天明の比
ゆ家。此天井ハ五敷一席風のゝく造り有く佐ゆ見て
世物ゆ出せしが今程も達人の所蔵ゆあるや。清左衛
門も死失せ鐘木町も年くゆ衰へ笹屋の横も低くう
毀ち壊し。ばゆゆい鐘木町不残草家とあまり笹屋ゆ有

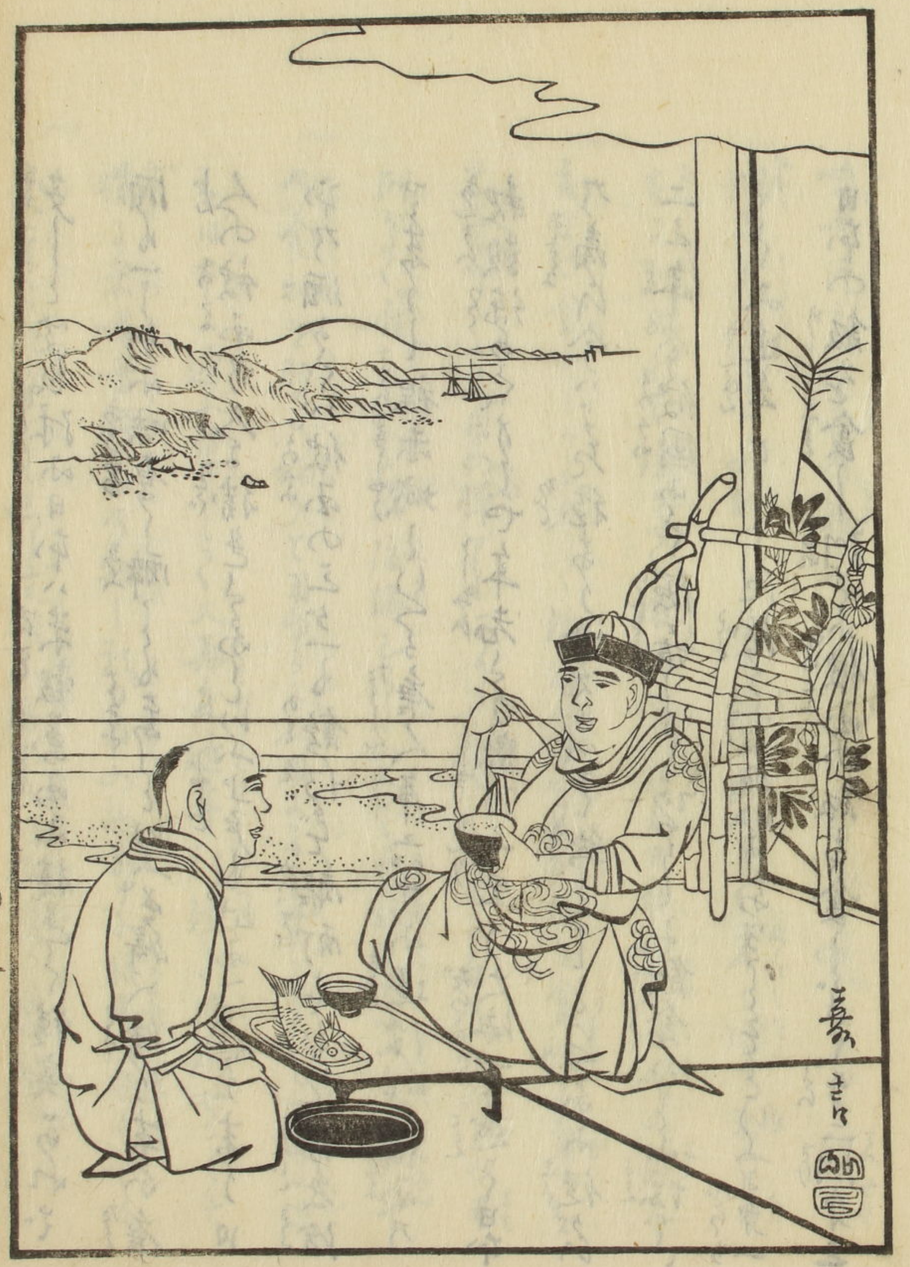
春亭画

一 祝三絵あるじも皆散くゝ小賣拂ひぬ書棚おびゝも大石の
ゆゝ殘りたゝ。無爲の樓上よ登れて懷古の情殊カリ
ぢやしゝ。無爲の孫さく今ハ絶ちて。遠東所とさ彩
ル不拘亡び先い書家の蒐集とありし。見るゞうちゝ移り雲
き。歎ぜるゝ。一のゝりあり。生存寛政年間よいゝり。繰り
紬しき書棚。絶ゝ二三家。僅人も建立せしゝど昔の俤ハ
一のゝぢ。無爲ゝまゝるどの大ゝ二階のちゝゞ幅を間半
繰ル一のゝく二四人ゝを撰へあゞゝ飲食のおまくゝ拵
ゝ爲ゝ紙あゝし。余ゞ初よ伯父ゝ俤ゝ皆金とゝゝ
一 仏乃内ハ常ゝ人ゝ揚くんとゝを志ゞれゞ。人ゝ多
て揚くんと爭ゝ爲くゞゞ。其多さく才藝ゝしあバ。ゝゝ
ゝゝあゞゝ人乃うゝまゝざくんや
一 ゝるさんゝ乃ゝ中ゝハ。ゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
とあくゝ乃ゝ。ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
聲ゝ乃ゝハ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
一 ゝまゝあゞゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
ゝ乃ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
ゝく。ゝゝ。ゝ何ゝゝく。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ
ル一ゝ。ゝゝ。
一 信山伏醫師神主あゞゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ

いとふべし。如ㇾ聖人の道乃すあどいんちしぶる又ふくし
手多ぞうふ広ぼ者てもさう

一同堂囲ぶ詩ふ解吟僧亦俗習舞鶴偏癖と雖ふ今時乃
僧侶毎家凡愚ぞ八倫たしぶし。家ある僧も。只怪蒼の
風乃ことみて世よ街ふの徒乃ことあり。実家実ぶ乃僧ぞ希く
同堂氏ぶ是をみく免るるや。此句六如上人の宝に出付事を
し給。平世氏ある人乃弟子て。余ぶ僧りき今ぞ者偽のことみ
ゆるこしあり。

酒乃ことみるく清酒よあるし八絶ふ石四五十年ぶるるのるとと
ど。今みてふ和泉の偏地ハ皆濁り酒あり。唐土なども濁り酒



多くしてやがて酒は日本ハ米穀豊富ゆゑ諸国ハ糯米穀多く糯米あれど
酒は一しほ味厚く醉こゝろもとなく酔へ海の事ハ唐
人の彼国乃人を猜さるゆゑ上戸も酒くらう事ハ日
本乃酒おくハ彼国の三が一も飲ずして酩酊せしとゝ毎度後
ゝ来りし程赤城といふる唐人年六十ハ過はれハ彼国乃
勅類ゆゑ年先ゝ数百千里乃大海を越く日本
乃商人今ハよろ程ありやえりいく無るべしといふハ従ひ
二三年ハ彼国ハ強盛しゆゑ飯食のことハ強ひ
くゝ迚年ゝ来たる事ハ海の事ゝとゝいふ第一
日本の飯を食ひ別くハ彼国の飯を食ひ第二酒第三

味噌汁あく香乃物あり是等乃ゝ日用のもの赤程赤
城ゝ中才だりハ六十絡ハ乃ふまく年く後ゝ日
本ゝ到ぬれど塩ぐく後海せず後ゝ日本の米味噌の類を
元よゝ食せずして久く後海せざれど別段ゝ食味ゝ奇ゝを
あすやうゝ人見の悼ゝ所ゝ日本乃物のこゝ用
ひぐく唯海ハの事ハ後海せずして一年半年
乃食物を碧へ吹りて用ゆるゝ人見ゝ見ずゝ死ず近
き日本ゝ通ゝ来ゝ又再度近年引続き後海せずして
後ゝ来味噌酒書乃物ゝ新日用のあるハ我国に成せる
人ハ生ゝ死るを忌ずゝ程山海の珍味を貪り求ハ奢

一山乃ゆるしたる地ニ庵り結びて世を逃れ住てんとのぞんで
こゝ乃ふし乃人伝聞しき去ふ遠ざかりて住まゝかん
ふハ又思ひよらし

一我子ゆゑ人乃やゝじ取乃雪と作りて。鄰居の正声も
りてゝ。生人乃情ゆゑにやりぬべし。又雪の眞ふ象し小僕ふ
酒をふしもり俳風流を矢ハ侯

一伏見ふ交りし盲人乃医。尾義意俊といしゝ或時の経分
ゑ　手ふれた紙乃書ふる蛞蝓ふ　夕ふもりて実境あり
一去雪素毫の雛結乃ふ。紙ふ織りて。詩歌あゝふハ仙ゆゑ
やうふりんあし ぬきゝゝ。それ山さを知ゝぶれゝ。人

情乃安曲小通し。一唱ゝ三嘆せしもる山道ふ多し

一其角ゝ讀琵琶行と乃ふ髭ゆく　十五夕頃を歓ゆく夕ふ乃
月と嗤ぜし十五ゝ素情きたせる秋りん夫。頃ゝ全盛を見
し。ゝゝふの月乃五夕ゝ雲ゝ蕭の姿をうばゝて。絶妙乃作とりふ
ゝ。白楽天の數百言を費せし是を学ゝ脳ゝ

一同人の作ゝ　稲書や花のふき東ゝふハ西ゝいゝし下乃五夕ゝ
毎ゝてゝ乃ゝ乙由ゝ　萍やゝふゝ西ちゝの岸ゝ咲とりいし
ふゝ毎ゝ下に岩ゝ。実ふ萍の白ハ世乃中ゝ変遷常あるを
よくいゝ云ゝ山人の胸懐ゝ知ゝ

一支唐禅師ゝ源ゝ和ゝ又の白ゝ乃ゝ有ゝ　清風行脚乃時

出羽国より同宗の寺ありて、ぜんぜん迫谷あり。庭前に
椎の木の大なるが枝さしかはせり。一日住持此木
を人をして切りたおさしむ。枝らうはらより雌雄の象二羽
出て飛去る。其外をひらきあらためるに、ゆくりなくふの形を土にて造
りたるが出たり。是中古の八幡宮也。毛かしら生ずる啄ある
ふるきかしら。生気なしといふやうあり。三つ子ふたたび親
鳥往来あり。住持こゝろ悟しとなる。禅師の是を受なしたるす
あり。しかるのちにあるべきいとなり。拾し古歌ふ　ふくろふの暖
免土小毛がちなる昔のあさけ今ゆのあり　と此すを
いにしへのあるべし。鳥名ハ皆土をはく所のごとくなるもの

あり。住持ハ禅師乃憚物を感せり

一　雲禅師住濃ヨ迫谷の打ふし。庭前の木ふかつぽ鳥とりしが
来りて数日啼居て去れり。別ヨ人を恐て体ハ赤ハ近寄
て乃ふ。用去めり。かゝるに数日なれども用ひなる
ハ餌を啄むこと一つなし。終日啼居るばかりあり
ふ。後ハ日ヨ毒にて餌をとゝび啖をとゝのいあるを少
かるるハいまゝ変ずること不思議あり。限りなく人こゝ
ろやしく乏り

一　山城国笠置辺の山ヨ秋の初乃頃彼辺ふく日ごとにふ
ゆ。毒にて大ふしく出るもこのふまりしろ光あり。他乃

ほとくとぎすなき出あくぶ形ちはあるやうなる人家の屋
近くも山のふる所まくハまた其夢覚
一天明癸卯の仲秋伏見くゝ行るのかりしぶ四方ゝ雲ゝくはち
ふゝ素乃月の霞籠ゝる様ゝふてゝそれゝゝも雨
たやとゝふゝ雲のくぶハあゝぶ若狭山とつの峯も見えず大
佛殿の棟ル峰ちハやゝぶ猛近ち拝ルおゝ雲ゝる
ゝるぶゝくぶ松杉もゝゝ糸だ怪しゝ思ハぶ肩衾乃を
くれ寺のげく頭の中に道行人も怪しゝて土降ゝとゝ
まゝ来ル仏付ぶ行ゝるゝゝゝと只りぶ次の日
又ゝ次の日ゝ月ゝらハくぶ日暮ル光なゝく只月を至むが如

くあゝ板葺あぶふゝ所の穢ゝ様ゝくふ毋ゝふく構集む屋し拝ル
人ゝふ間ゝ去降ゝくぶ雨ゝる。三日ゝゝして空晴ゝゝ
一同ゝ九月のゝの頃ゝ月光あゝ唯集ゝゝ赤ゝ童あゝ暮
ぶふ去ゝゝゝ所ゝゝゝ弥ゝゝゝ
一其月の末乃頃より満天紅ゝて人の顔ふ映ぶ赤ゝ小南ゝ
及ぶゝ初夜近ち降ゝる九頃ゝ
一滋賀ゝゝ越る山中の峠ゝ都近ち行の風系乃地ゝ系ぶ中村
氏あゝ行ゝる人の童湯の日ゝ同志後ゝ行ゝ湖ゝ行ゝ
ゝ行ゝゝゝ堤ゝゝ又ゝゝゝ道ゝ人ゝ滋賀ゝゝ越ゝ
ゝふ。雲ふゝゝゝ来れ。ゝれ人ゝゝ月を側てゝゝ

其ゝの形ゝかゝりとして我ゝ張り出ゝ矣ひ合しふを後世事人
ゝ信れむ。かし風系妙めるを知て皆ゝ有ることゝいひき
一但来の義乃古楽のゝを歎美して。三絃あゝの調ハ強ふ弱くさりて空
ゝ心あし。甲の義をとゝくゞ甲の糸を調し。乙乃義あれゞ乙の糸を調
ゝと出きし。是ハよゝ三絃を世俗ハさゝ毒ゝ。強ゝ三絃をもて
古楽の雅義ゝ比ゝ。ゝ死ゝ。今の楽を粧古の
楽あり。人情を融和ゝ何ぞゝ。余も糸弄のゝハ性の
好ゝ所ふゝ多ゝ。三絃を浪花の音を天下第一とも
ゝし。甲の糸を調ゝ乙乃義ゝ。甲の義ゝ乙乃糸を合す
或ハゝゝ。絃繁。絃跡ゝ曲苦むの類を妙知ゝあ

らるれどいとがらし。素義を唯示武乃之絃乃ことを聞て評せし
張ものあるべ。何ものも之道示深くうばれて之を不儀しがたきも
いとそ

北窻瑣談巻之壹畢